

面に関する良き手引き書であったといっておかろう。

#### 籀木政岐先生略歴

- ・明治35年(1902)7月24日生(於石川県金沢市)
- ・第4高等学校を経て、大正15年(1926)東京帝大天文学科卒
- ・昭和9年(1934)理学博士(東京帝大):“運動星団、近距離星及高速星の運動より見たる局部恒星系の運動について”

- ・昭和10年(1935)4月東京帝大助教授
- ・昭和21年(1946)12月東京帝大教授
- ・昭和38年(1963)東大退官(同名誉教授)
- ・昭和38年~59年国学院大学教授,(退官後名誉教授)
- ・昭和47年~現在兼国土建設学院教授
- ・昭和60年現在83歳

#### [SAMの研究会にまつわる思い出]

SAM夏の研究会は前後13回続き、その後も、科学研究費“天文学総合A”の援助を受けて同系列のシンポジウムが行われて現在に至っている。小生にとって、特に思い出が深いのは、第1回(昭和36年7月)・第2回(昭和37年7月)・第3回(昭和38年8月)の池の平研究会、第4回(昭和39年7月)の菅平研究会、第6回(昭和41年7月)の八王子研究会、第8回(昭和43年8月)の蛭ヶ野研究会、第9回(昭和44年9月)の京都研究会である。

第1回の池の平研究会の折りには、小生は一人で大阪から北陸線まわりで直江津に出て、そこから高田(この連隊が、日本でのスキー発生地である。)を経て田口駅(現妙高高原駅)へついた。籀木(東大)・清水(京大)両教授を中心とするSAMの中核部隊は「とどめき荘」(研究会や懇親会の開催場所でもあった)が宿泊場所であったのに対して、我々一般組は「白樺荘」に泊まって、毎日下駄履きで往復した。途中に、大きな池があって、散歩に適していたことを覚えている。懇親会の折り、東京学芸大の籀木敬信先生と話したことや、水路部の大脇直明君(現東京学芸大教授)とも「今後は君僕の呼び名で付き合おう」と誓ったことなどを思い出している。なお、後年になってナウマン象の墓場で有名となった野尻湖へ一同で遊びに行ったこと、その途中に俳人一茶の住んだ家屋があったことなどを記憶している。

第2回以降は中央線まわりで、長野始発の夜行で帰った。清水先生や小暮智一・大谷浩両君らと京都まで一緒であった。我々4名に京大から水路部へ行った山崎君(長野県出身)が加わって善光寺へ参詣し、名物の川魚料理(鯉のあらい?)を食べたことを覚えている。第3回目の研究会は東京天文台の故松波直幸君の世話で荏原製作所の池の平寮(「とどめき荘」の近くにある。)で行われた。中国出身の劉彩品嬢(現木村夫人)を柳さんという姓名の日本人と間違えたことや、遠く仙台から藤本光昭(現名大教授)・井上猛(現京都産業大教授)の両君が参加したことを覚えている。

第6回目の八王子研究会は、海野和二郎教授を中心と

する東大天体物理学研究グループが参加された(そして、成相・富田の宇宙論研究グループに海野門下の加藤正二君(現京大教授)が加わって膨張宇宙における重力不安定及び熱不安定の2論文が出来上がった)点で思い出が深い。第8回目の蛭ヶ野研究会は岐阜大の今は亡き江本祐治氏のご尽力で行われたが、台風が会場近くをおそった点で思い出が深い。研究会終了後には、東大の高瀬氏や京大の小暮・大谷両君と共に五箇山へ一泊して北陸へ出たことをなつかしく思い出している。第9回の京都での研究会は、宇宙論がはじめて大きなテーマの一つになった点で意義深かった。当時出来たばかりの御車会館で研究会(実質的な主催者は成相・富田)が行われた。石田憲一君と森本雅樹君らの白熱した議論があったことなどを記憶している。

#### 訂正

79巻3月号の我が国における宇宙論研究の5先達(1)のうち下記の個所を訂正して下さい。

p. 61の右側の下から19行目:

Sendai Astronomij Raportoi  
↓  
j

p. 64の写真:

中段右側 萩原先生, 前列右側 三村先生  
↓  
左

#### 学会だより

##### 会費納入のお願い

4月より会計年度が改まりますので新年度会費の納入をお願いします。会費は特別会員10,000円、通常会員3,500円です。納入には今月号に同封の振込用紙(手摺料本会負担)を利用して郵便振替口座日本天文学会(東京6-13595)宛か、銀行送金の場合は三菱銀行三鷹支店(4434490)普通預金口座日本天文学会宛、あるいは現金書留をご利用下さい。会の円滑な運営のため、できるだけ早くご納入下さるようお願いいたします。